



vol.2.5

若
苗
号

目次

1

ローズマリー・サトクリフ

／丸山由生奈

2

辻村深月／中村朱里

3

伊藤計劃／作間充将

「私はあの優しい世界を
あなたから教わったのだ」
『凍りのくじら』 辻村深月

「けれど、ここ以外の場所は静かだろうな、
と思うと、すこし気持ちが悪いらしいだ。」
『虐殺器官』 伊藤計劃

「ねえ、今までの人生で一番
好きだった瞬間って何？」
『冷たい校舎の時は止まる』
辻村深月

「フラビウス、おれは行かないよ。」
『銀の枝』 ローズマリ・サトクリフ

「さよなら、わたし。
さよなら、たましい。
もう二度と会うことはないでしょう」
『ハーモニー』 伊藤計劃

私がローズマリ・サトクリフという名前に思いしますが、その枠組みを越えたところに私が出会ったのは、本屋や図書館を歩いている時は引き付けられているように感じるのです。ではなく、本の中でした。ある人のエッセイを読んでいた時に作品が紹介されていて、あまた、神話や伝説を題材にしているというところも面白そうだなと思ったのを覚えていて、あまた、神話や伝説を題材にしているという人から本を薦められても「他人の価値観と私。神話や伝説がいまに残っているという価値観は違うのだから押し付けられないでほしい」といふ、少なくともいまに至るまでの人々が持ちになる私にしては珍しい感想でした。そを語ってきたからにはかなり残したりということにしてその後私はまたそのエッセイがきっかけに語られた内容だけではなく、伝えてきたものになって、「岩波少年文庫全巻読破！」といふ人によって力を持つのだと思います。この受けた夢を掲げて本を読みはじめることになり、け継がれてきた民話の力ともいえるようなものの中でローズマリ・サトクリフとその作品の「ローズマリ・サトクリフの作品世界では、そのものに自ら対面することになったのです。さらに彼女の語りの力によって増幅されている。ここでは特に児童文学として読まれているのではないかと思われるのです。」

作品について書いていきたいと思っています。彼

女の作品は主にケルト神話やイギリスの伝

さて私はよく好きな本を聞かれると、面倒

説・歴史の世界が舞台となります。それでは「ファンタジーが好き」だと言ってし古い時代に起きた出来事・語られた物語をなまけていたのですが、正しく言えばそうではぞるだけなのでしょう。私はそうであるところとありませんでした。きっと、ドラゴンが火を思いません。私がここに感じ取るものは、吹き、剣と魔法で大抵のことが解決されるよいまを生きている自分にも重なる人のくらし、うな便利な世界を「ファンタジー世界」と呼ぶとしてその中に生まれる、目的達成に向けてぶ人もいるのでしょうか。そこは私には合わない世界や自らの戦いという「生命の姿」でいいし、おそらくそちら側も受け入れてはくれないと思います。たしかに「ローマン・ブリないと思います」「あなたの求めている不便なテン四部作」などにおいては、その歴史にま「あなたの求めている不便な世界なんかここつわるところに注目する人もいるだろうとはには無いよ」と言って。それでは私は本を通

どこへ向かうのが好きなのか、何に出会いたいのか、それを考えさせてくれたのがローズマリ・サトクリフの作品なのではないかと思えます。私は彼女の作品世界に描かれるような、いまの私とは、時間的・距離的に離れた世界にあるけれど、そこでたしかに繰り広げられている、人の当たり前のくらしに思いを馳せるのが好きなのです。極端に言ってしまうえばそこでくらし当たり前に悩み、奮闘する他人と自分を重ねて、一緒にになって苦悩するのが好きなのかもしれません。その先に在るものがストーリーの用意した成功や達成、時には不幸か、自らの見出した結論かは時によるだろうけれど、また再び、三度引き付けられてしまうのです。

先にも書いたように私は他人に本を薦められるのを好みません。同時に押し付ける趣味も持ちません。これを読んだあなたは別に今からWINEで検索して本を探しに行く必要などありません。おそらくこんなことを書いているとこの冊子の趣旨に反すると怒られてしまうのでしょうか、このページについてはあえてこう書いておきます。私

はただ、あなたが本の森を彷徨って中、偶然に出会ってしまうか、いつか何かのきっかけで出会う機会があればいいと思うだけです。

ローズマリ・サトクリフについて

1920-92。イギリスの小説家。

2歳の時の病気が理由で歩行困難となり、のちに車いすでの生活を余儀なくされる。14歳で美術学校に入り細密画を学ぶが、1950年ごろから小説を発表する。

ローズマリ・サトクリフが好きだ。

辻村深月が好きだ。

1980年2月29日生まれ。
千葉大学教育学部卒。

『冷たい校舎の時は止まる』で第三十
一回メフィスト賞を受賞し、デビュ
ー。小学生の頃から綾辻行人氏の大ファン
で、何度もファンレターを送り、編集
部の厚意で綾辻氏本人と手紙やメール
を交わす間柄となったほど。メフィス
ト賞に応募したのは、綾辻行人氏と同
じレベルから出したいという希望も
あったこと。ペンネームにある「辻」
は、綾辻氏から一字取っている。二〇
一二年には『鍵のない夢を見る』で第
一四七回直木三十五賞を受賞。小説と
フィクションの世界を愛し愛される小
説家。

『ツナグ』

一生に一度だけ、死者との再
会を叶えてくれるという「ツ
ナグ」。一度だけの機会を、
私だったら誰に使うだろうか。

「嫌なことがあったり、自分
を感じるときほど、世界が美しく見える
のは何故だろうか」

『本日は大安なり』

本日は大安吉日。Hotel Armaiti では、四組の
カップルの結婚式が行われようとしていた。新郎
を試すために入れ替わった双子の姉妹。妻がいる
ことを浮気相手に言い出せないまま式当日を迎え
てしまった新郎。結婚式での毒殺計画を立ち聞き
してしまった小学生。

怒濤の展開の末、全てのピースが繋がったとき
の爽快感は、はかりしれない！

「世界と繋がりたいなら、
自分の力でそれを実現しなさい」

「明るい絶望と 前向きな諦め」

デビュー作『冷たい校舎の時は止まる』は、高校生八人が登場するミステリー。ある雪の降る日、大学受験を控えた高校生八人は、校舎の中に閉じ込められる。思い出せない自殺者の名前、止まってしまった時計、凍り付くような寒さ。八人の内の一人が死んでしまっているかもしれないという状況の中で、彼らは追い詰められながらも、自らの悩みや葛藤と向き合っていく。

全国模試一位の秀才、賭け麻雀で停学になっていた不良、自分に自信のない女の子。ばらばらの個性を持った八人全員に、どこか共感できる。登場人物全員をきっと好きになる。

手塚治虫や藤子・F・不二雄の世界観がリンクする物語の影響を受け、作品同士で登場人物が繋がっている。高校生だった登場人物が、別の物語では主人公の母に、先生に、憧れの人に、懐かしい友達に思いがけない場所ではったり出会ったような、そんな気持ちにさせてくれる。

山梨県笛吹市出身。

「僕たちは、どこにでも行けるし、変わっていく。僕には言える。いつか、絶対に平気になる日が来る」

『ドラえもん』藤子・F・不二雄作のファン作品として、『凍りじら』が全体的に始まる。『凍りじら』が全体的に始まる。

『ふちなしのかみ』若草第二小学校の花子さんは階段に棲んでいます。階段を心の底から一生懸命掃除すれば、花子さんに会うことができます。花子さんには会えないこと、それは、嘘をつくことです。もしそれを破れば――！友達についてしまった嘘、グループで構成される友人関係、怖い先生。私たちは楽しかった小学校時代だって、そんなものたちに眠れないくらい悩み、全力で走り回っていた。

五つのホラーが収録された短編集。あの頃を懐かしく思い出し、怪談に怯え、そしてなんだかうしろめたくなる。そんな一冊。

伊藤計劃が好きだ。

この作家の存在を初めて知るとき、きっと多くの人がそのタイトルに困惑するのではないだろうか。伊藤計劃という作家を象徴する三作品『虐殺器官』・『ハーモニー』そして『屍者の帝国』。いかにも「死」を感じさせるおどろおどろしいタイトルの二作品と、非常に対照的な明るさを読者に感じさせる『ハーモニー』、この三作品が書架に並んで所蔵されているというのは目を引く光景と言ってもいいでしょう。

伊藤計劃が世にデビューしてから三年、彼は癌との闘病の末この世を去ります。彼が残したオ리지ナル作品は『虐殺器官』『ハーモニー』の二作品のみでした。その後残された資料を元にデビュー当初から伊藤と親交の深かった円城塔によって書き上げられたのが『屍者の帝国』です。多くのファンから惜しまれながら三十代でこの世を去った夭折の作家・伊藤計劃の完結した作品としては最後の作品となった『ハーモニー』今回はこれに触れてみたいと思います。

「大災禍」と呼ばれる世界的騒乱の後、人々は食事から精神面、更にはその言動に至るまでありとあらゆるものを指導・管理される高度な医療社会の中にいました。人体に「Watch Me」と呼ばれるナノマシンを埋め込むことで人体の全てを管理する「優しさに満ちた世界」、そしてそんな世界で発生した同時多発的な大量自殺。そしてその背景にかつての友人ミアハの死があると知った主人公トアンはこの謎を追い始めます。

本来であればありとあらゆる病気や不健康を解決するこの作品の医療システムは全人類の理想・悲願と言ってもいいものでしょう。しかしそのような社会の中では人々は「痛み」を失うことで自己や意識を失っていくというのです。今日の我々の社会が目指す一つの未来の在り方といえるこの作品の世界は、やはり一見私達にとって好ましく思えるモノではあるけれど、その世界では失ってはならないものを気づくことなく失ってしまうという可能性が提示されています。

あらすじを見ると我々の世界・歴史が辿る一つの可能性を描いているなんてことの無いSF小説のようにも見える人もいるかもしれない伊藤計劃の著作。しかし読み進めるほどにそれは私たちの生きる世界の中であまり触れられることの無い「意識」と「無意識」の問題を投げかけてきます。私達は何を以て私達であるのか？その問いにきつとあなたも引き込まれていくことでしょう。

伊藤計劃（一九七四～二〇〇九）

二〇〇七年に『虐殺器官』でデビュー。主な著作に『ハーモニー』など。

これらの作品も癌との闘病生活の中で執筆されたが、デビューから二年後に闘病生活の末、三四歳でこの世を去る。



図書資料情報



ローズマリ・サトクリフ

- ・『The eagle of the Ninth』
中央 3F 一般図書 Penguin933 Sut
- ・『太陽の戦士』
中央 B2 研究書庫 908 00068 26
- ・『炎の戦士クーフリン』
中央 2F 一般図書 一般・ちくま文庫 さ-40-2

辻村深月

- ・『冷たい校舎の時は止まる』 上・中・下
戸山 3F 学習図書 913.6 ツ017
- ・『スロウハイツの神様』 上・下
戸山 3F 学習図書 913.6 ツ023
- ・『ロードムービー』
戸山 3F 学習図書 913.6 ツ021

伊藤計劃

- ・『虐殺器官』
戸山 3F 学習図書 913.6 イ068
- ・『ハーモニー』
戸山 1F 学習(文庫) 080 B022 41
- ・『屍者の帝国』 (円城塔との共著)
戸山 3F 学習図書 913.6 068



※掲載した配架場所是一部です。詳しくはWINEをご覧ください。





LIVSの活動



- ・ わせとしょ探検隊！
～発掘！早稲田のBBN～

あの人気Web連載企画が帰ってくる！様々なテーマのもとで、図書館の利用方法や魅力をお伝えします。12月下旬から随時公開予定、お楽しみに！

<https://www.waseda.jp/library/news/2016/12/15/2679/>

- ・ りぶまぐ！

2016年以降、定期刊行している『りぶまぐ！』LIVSスタッフおすすめの本から、図書館の魅力まで、楽しい記事を掲載しています。2018年春にはvol 3が発行されます。ぜひお手にとってみてください！

- ・ Library Gifts あなたに贈る本

この冬は、LIVSメンバーが大切に思う人に贈りたい本を厳選して中央図書館に展示致します。

来年度の春には人気企画、「一行展示」を再び開催。LIVSメンバーが中央図書館をまたまたジャックし、皆さまの心にエールを送ります！！





Presented by
Waseda University Library Volunteer Staff “LIVS”

『りぶまぐ!』vol.2.5 若苗号 2017年12月15日発行

編集・発行：早稲田大学図書館・ボランティアスタッフLIVS

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学中央図書館 利用者支援課

TEL : 03-5286-1659

<http://www.wul.waseda.ac.jp/CLIB/livs/>

※本誌掲載の写真、記事、図版等を無断で転載・模写することを禁じます

本PDFは、執筆者の許諾のうえ冊子版を電子化し、
「早稲田大学リポジトリ」より公開するものです。
無断転載・転用を禁じます。

早稲田大学図書館